

アジア歴史資料センター インターネット特別展 「公文書に見る日米交渉：開戦への経緯」

国立公文書館 アジア歴史資料センター

アジア歴史資料センター（アジ歴）では2005年12月8日からインターネット特別展「公文書に見る日米交渉：開戦への経緯」を公開しました。この特別展は2004年2月に日露戦争開戦100年を記念して公開した「公文書に見る日露戦争」、2004年12月に公開の「公文書に見る岩倉使節団」に続く「公文書に見る」インターネット特別展シリーズの第三弾です。

「インターネット特別展」の目的と特長

一連のインターネット特別展は一般的に馴染みのない公文書を研究者だけでなく広く一般に紹介するために始めたものです。インターネットを通じてのみサービスを提供するアジア歴史資料センターと利用者との唯一のインターフェイスはホームページです。物理的な展示室を持たないインターネット上の「バーチャル」な資料館であるアジ歴はホームページのコンセプトやデザインそのものが成功の鍵を握るといえます。そこでアジ歴設立の企画段階では、一般や中高生向けに資料を選んで展示する「学習閲覧室」や歴史研究の参考となる情報を提供する「閲覧参考室」等も検討されました。しかし、アジ歴が歴史認識問題に関わるような特定のテーマで資料を編纂することに対して利用者から種々の反応が予想され、アジ歴のアーカイブズとしての中立性の観点から検索閲覧機能に特化したホームページとすることとなりました。その結果、新聞やテレビ、ラジオなどメディアでセンターが取り上げられるとアクセスが急増するのですが、数日でまた通常のアクセス数に戻る状況でした。最大の原因は、資料が公文書であり、判読困難な手書き文書が多く含まれていることや、文体や用語自体が現代と異なることなど、研究者以外の利用には困難であり公文書資料そのものが一般に馴染みのない点でした。

海外の公文書館も公文書検索だけでは利用者が増えないという同様の悩みを抱えています。その一つの解決策として各国の公文書館が取り入れているのが教育（エデュケーション）と娯楽（エンターテイメント）とを融合させた「エデュテメント」という考え方です。利用者がアクセスするのを待つのではなく、積極的に出来る限り内容を分かりやすく娯楽性を持って誰にでも理解しやすい方法で情報を提供することで

す。米国の国立公文書館のサイトでは、昨年ヒットした映画「ナショナルトレジャー」で暗号が書いてあるとされた「独立宣言」の裏側をめくって見られるページがあります。



映画「ナショナルトレジャー」で話題になった「独立宣言」の裏面が見られるようにした米国国立公文書館のホームページ¹

アジア歴史資料センターが提供する資料画像はモノクロです。そのため朱書きの部分、欄外に薄く鉛筆で書かれたメモ、印判、毛筆の濃淡、紙の質感を表すことが出来ません。確かに、歴史研究にとっては、朱による訂正や欄外のメモなどの例外的なものを除けば、モノクロであっても文字が読めれば研究には十分です。モノクロの文字の羅列は一般の利用者にとっては退屈なものでしかありません。ましてや判読不可能な草書体で書かれた文書になると例えそれが重要な文書であっても読めなければ意味がありません。そこで「公文書に見る日露戦争」展では「エデュテートメント」の考え方を取り入れ、防衛研究所図書館が所蔵していた日露戦争関係の写真や、「天気晴朗なれど波高し」で有名な電報の原文のカラー画像、外交史料館所蔵のポーツマス条約などの外交条約のカラー画像を提供することで一般利用者の関心と呼ぼうとしました。その結果、新聞に取り上げられインターネット上でも話題となり、研究者のみならず多くの一般の方からのアクセスがありました。さらに利用者の強い要望もあって常設展示とすることにしました。利用者からは新しい企画展示を望む声もありました。そこで企画したのが第二弾の企画が「公文書に見る岩倉使節団」でした。

「特別展」の基本構成について

テーマを設定するに当たって考慮したのは、アジ歴の所蔵資料に文書群としてある程度の量的な塊がありながら、それらの文書群が一般には知られていないことでした。岩倉使節団については一般に久米邦武がまとめた「米欧回覧実記」があります。また、研究書や一般向けの本も多く出版されています。しかし、アジ歴がインターネットで既に公開している公文書館所蔵の使節団関係公文書『大使書類』は300冊ほどあり

¹ <http://www.archives.gov/national-archives-experience/charters/treasure/index.html>

ますが、あまり利用されてきたとは言えません。そこでこのような一般に利用されてこなかった公文書を誰にでもわかりやすい形で紹介することを特別展の方針としました。さらに資料の紹介にあたっては中立性を保つために時系列で紹介すること、解釈を避けそれぞれの文書の内容をそのまま紹介する解説を心がけました。この基本的な考え方は特別展を構成する上での基礎となっています。また、一見無味乾燥に見える価値中立的展示方法は多くの利用者から支持されています。その他、人物紹介、重要なトピックを取り上げて関連資料を紹介するなど基本的には「公文書に見る日露戦争」と同じ構成で作られています。今回の「公文書に見る日米交渉」も同様の構成になっています。それぞれの構成要素を次に紹介します。

概説ページ「日米交渉とは」

特別展の概要を出来る限り客観的に紹介するページです。歴史を解釈するのではなく資料を理解するために必要な基本的な事項を時系列で紹介するページです。今回は多くの研究者の助言を踏まえて日米関係が急速に悪化する発端となった昭和12年(1937年)7月7日の盧溝橋事件に始まる日中戦争(支那事変)から、野村吉三郎大使が米国に着任し、いわゆる「日米交渉」が始まる1941年2月間での説明と当時の内外の状況を説明しています。さらに今回使用した資料の中心となる外交史料館所蔵の『日、米外交関係雑纂／太平洋ノ平和並東亞問題ニ関スル日米交渉関係(近衛首相「メッセージ」ヲ含ム)』全19巻やその他の資料群の解説をしています。

年表を柱とした展示：「詳細年表」と「ダイジェスト」

日露戦争展や岩倉展では年表は一つでした。しかし、今回の日米交渉にあたっては交渉期間の10か月あまりの間に作成された膨大な交渉記録が残っています。さらに、日米の外交交渉と同時並行で進められていった当時実質的な国の最高意志決定機関であった「大本営政府連絡会議」や「御前会議」等での議論の記録を「日本の政策を巡る動き」「日本軍の動き」も含めて単に外交だけでなく国内政治や軍事も含めて並行して読めるようにしました。外交史料館だけでなく、国立公文書館の持つ国内情勢に関する記録や防衛研究所図書館の持つ陸海軍関係資料も並行して利用出来るようになっています。主要な記録だけでも500項目を超えます。これらの記録は「詳細年表」に整理され、全ての項目に対して解説と関連資料の画像が付けられる予定です。

一方、あまりにも詳細な年表は一般の利用者にはかえって理解しにくいとの研究者のアドバイスを受けて、26項目からなる「ダイジェスト」版を作成しました。取り上げた事項についてはアジ歴のモノクロ画像に加えて、カラー版も提供しています。これによって、モノクロ画像では体験出来ない電報記録にのこった筆圧の持つ生の迫力

や綴じられた資料をめくるように見ることによって資料を直に見るような実感を味わうことが出来るようにしています。特別展では出来る限り資料のカラー画像を提供して、公文書に触れる機会がない一般の利用者に対して公文書を出来る限り原本に近い形で紹介しています。



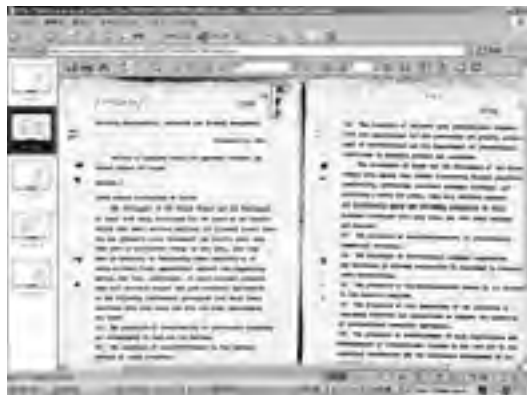
ダイジェスト年表（クリックすると関連資料の説明ページがポップアップ）

年表に取り上げる項目については一般的な歴史年表だけでなくアジ歴が提供している資料を詳細に整理して決定しました。また、日米交渉を理解する上で鍵となる日付／時間の記述に際しては、日本と各国との時差を配慮して今回は東京時間に統一するなどの工夫をしています。その結果、一般的に11月26日となっている「ハル・ノート」の手交は、日本時間27日となっています。このように資料を見るときに重要な手がかりとなる日付などにも配慮しています。



「ハル・ノート」を外務省に伝えた電報綴りのある資料の解説ページ

アジ歴の本来のモノクロ画像は、マイクロフィルムに撮影するために、綴じられていた原本を解体した状態で撮影された画像がもとになっています。そのため、綴じ込み部分が読めないなどの問題は発生しませんが原本のファイルがどのようなものかは利用者には判りません。そこで特別展では別途ファイルを解体せずにページをめくる状態で撮影をしたものを紹介しています。その結果、綴じ込み部分が読めないところもありますが資料そのものの臨場感を味わえるようにしています。



アジ歴で提供している「ハル・ノート」のモノクロ画像。撮影のために解体されている

「主要人物」紹介

人物紹介も特別展の柱となっています。ただし、人物紹介では歴史的な評価をするのではなく、その人物が日米交渉など取り上げたテーマにいかに関わったかを出来る限り客観的に記述することに努めています。一部からは物足りないとの意見もありますが、客観的な記述方法はアジ歴のスタイルとして利用者からも支持されてきています。また、人物紹介やその他で利用する写真については、インターネットで公開することを念頭に、著作権等にも配慮し必要な権利処理を施しています。



外交史料館に保存されている「ハル・ノート」が綴られた状態のカラー画像。読みづらいが資料の状態が実感できる。

歴史的な基礎知識を提供する「用語解説」

戦前の公文書には一般に馴染みのない用語が使われています。当時の公文書を理解するためにも用語の意味を知る必要があります。そのため、日露戦争特別展以来、「用語解説」の充実に努めてきました。用語解説も人物紹介と同様に歴史資料を理解する上で不可欠な基礎的知識を客観的に提供することを主眼としています。日米交渉では、交渉に関係してくる日米双方の外交官だけでなく軍人、さらに「国策遂行」（政策決定）に関わる「大本営政府連絡会議」等の様々な政府組織についての解説、米国の対日石油輸出全面禁止の発端となった日本軍が進駐した「南部仏印」の地理的

な位置など、公文書を読み解くために必要な基礎知識を確認するための基礎情報を提供しています。

参考資料室

今回インターネットでの初の公開となる、一般に「杉山メモ」として知られる「大本営政府連絡会議議事録」のカラー画像をそのまま提供しています。これまで復刻された印刷物としてしか見ることが出来なかった「杉山メモ」を原本のカラー画像として見ることが出来ます。その他、当時の外務省や陸海軍の組織、「宣戦布告」のような手続などの基礎知識、さらに「暗号解読」、「最後通牒」、「日米諒解案」など、一般に関心の高いことがらを所蔵資料をもとに解説する「トピック」を設けています。また、今回利用した参考資料を紹介する「参考文献」のように研究や授業での素材となる基礎資料も提供しています。

利用者との意見交換の場としての「アンケート」

アジ歴特別展の特徴は公開時に完成していない点です。これまでの特別展も半年近くをかけて内容を充実させていきました。内容を充実するに当たっては利用者の声を反映することに意を尽くしてきました。今回も既に多くの要望やコメントが寄せられています。例えば、以前の特別展で指摘された文字の大きさについても利用者が3段階で選べるようにするなどの改良を加えました。また、解説の書き方に対するコメント、誤字脱字等の間違いの指摘だけでなく特別展を支持する等、多くのコメントも寄せられています。また、次回の特別展のテーマに参考になる提案もあります。これらの利用者の声に応じていくためにも「アンケート」ページは特別展の中でも重要なページとして位置づけています。

おわりに

当初、時間を限って公開する予定であった特別展に対して常設を願う多くの要望が寄せられています。現在、これまでの特別展はそのまま常設展に移行しています。また常設展になっても資料の追加や必要に応じた改良は継続して行っていく予定です。アジ歴の特別展は一方向的に情報を提供するのではなく、利用者の要望を汲みながら時間をかけて育てていくホームページです。特別展が学校の歴史や総合教育の教材として利用されたり、歴史に関心を持つ一般の方々から広く利用されるだけでなく、歴史研究者の利用にも耐える充実したものになるよう今後とも努めていきます。